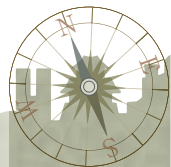


September

号外
2014過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞上町台地
今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム

vol.2 Document



企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング / 発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)

問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当: CEL弘本) ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

ホームページ <http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/ucoro/index.html>

U-CoRo Step2 壁新聞プロジェクト関連イベント

第2回「上町台地 今昔フォーラム」の まち歩きを開催しました。



テーマは“台地の遠足 浪花の町衆が愛した
「自然」身近な名所・名産・遊山・風景～”



壁新聞「上町台地今昔タイムズ」
第2号 (第1面)



今回の案内人は

島本多敬 (しまもと・かずゆき) さん

現在、京都府立大学大学院文学研究科史学専攻・博士前期課程に在籍にする若手の研究者

大阪ガスの実験集合住宅実験NEXT21の2階ホールに集合、まずは簡単なガイダンス

上町台地 今昔フォーラム vol.2 (まち歩き)

■日時: 2014年9月23日 (祝・火)
14:00 ~ 17:30

■コース: NEXT21〈ガイダンス〉
⇒ 東雲稲荷神社 (玉造稲荷神社分社) ⇒ 越中井 ⇒ 玉造稲荷神社
⇒ 三光神社 ⇒ 真田山陸軍墓地 ⇒ 興徳寺 (小橋寺町) ⇒ 城南寺町 ⇒ 中寺町 ⇒ 高津宮

■主催: 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)

企画: U-CoRoプロジェクト・ワーキング・島本多敬

■案内人:

島本多敬さん

(京都府立大学大学院文学研究科史学専攻・博士前期課程)

2014年9月23日に、U-CoRoプロジェクトの「上町台地今昔フォーラムVol.2」として、上町台地のまち歩きを25名の参加者を得て実施しました。

テーマは“台地の遠足 浪花の町衆が愛した「自然」～身近な名所・名産・遊山・風景～”。案内人は京都府立大学大学院の島本多敬さんで、主に18世紀末以降の江戸時代に焦点を当て、都市大坂の住民が親しんできた上町台地の風景と、そこに向けられた当時の人の眼差しを感じてみようというのがその趣旨。同時に、現在の景観に残された過去とのつながりを歩きながら再発見しようという試みでした。



出発前に地域の活動に関する資料も配布。高齢者外出介助の会の永井佳子さんは、同会が発行している「からほり新聞」を紹介。

スタート

大阪ガスの実験集合住宅

NEXT21

(大阪市天王寺区清水谷町6)



秋の好天に恵まれ、「台地の遠足」にさあ出発!

江戸時代の二人の眼差しを手掛かりに

島本多敬さんが、江戸時代（とくに18世紀以降）の大坂の人々の「自然」の「愛し方」を見るために、今回、先導役として取り上げたのは、次の2人の人物でした。

「名所案内記」とともに「遠足」に出発

白縁斎梅好 (1737-1802)

江戸時代の末頃、今橋二丁目に住んでいた狂歌師・書肆。安永7(1778)年に『絵本名物浪花のながめ』(以下『浪花のながめ』)、寛政12(1800)年に『画本狂歌浪花のむめ』(以下『浪花のむめ』)を著し刊行。両書には実際に訪れたさまざまな場所・風景について、狂歌を交えつつ細かに、またユーモラスに見つめた記述がみられる。

(『浪花のむめ』白縁斎梅好、大阪市立中央図書館所蔵)

暁鐘成 (1793-1861)

大坂三郷に生まれ育ち、幕末期に活動した浮世絵師・戯作者。近世大坂の代表的な名所案内記である秋里籬島の『摂津名所図会』を受け継ぐ『摂津名所図会大成』(安政2[1855]年以降、近世当時は未刊行)を著した人物。今回は小型の名所案内記『浪華の賑ひ』(安政2年)から、幕末期における上町台地の名所のエッセンスを捉える。

(『浪華の賑ひ』暁鐘成、大阪市立中央図書館所蔵)



NEXT21

伊勢神宮への参詣道、暗峠・奈良街道の出発点

NEXT21を出発して清水谷高校の西側から長堀通をわたり、まず足に向けたのは、「東雲稲荷神社(玉造稲荷神社分社)」。



この神社の北側を旧道が通っていたと説明する島本さん。江戸時代の大坂から東の方向に旅立つ出発の地がこの付近だったという。



東雲稲荷神社 (玉造稲荷神社分社)

東雲稲荷神社は、これから訪れる玉造稲荷神社の分社(2014年10月からは玉造稲荷神社分社に名称統一)。



上町台地の水資源—豊富な伏流水と井戸

「越中井」は上町台地の井戸水の重要性を伝える場所のひとつ。上町台地には伏流水が豊富なため各所に井戸が多数つくられ、「金龍清水」「増井清水」など、現在でも多くが固有の名前と伝承を伴って残されています。

越中井

台地の水を考える



越中井のすぐそばにある石碑は昭和9(1934)年に建てられ、揮毫は徳富蘇峰の手になるもの。その隣の「史蹟 越中井由来」には細川ガラシャの事績が記されている。

越中井 (中央区森ノ宮中央2丁目12)

この井戸の名は、豊臣期の16世紀末頃、付近に細川越中守忠興の屋敷が置かれていたことに由来します。この伝承がいつ頃からみられるようになったかは未詳ですが、寛政10(1798)年に刊行された『摂津名所図会』の「越中井戸」の項目には「むかし細川越中侯の台所の井といふ」とあり、遅くとも18世紀末までには、かつての武家屋敷との関連でこの井戸が語られていたことが知られます。井戸の傍らに碑があり、戦後に大阪の郷土史家・牧村史陽が記した案内板とともに、忠興の婦人ガラシャが関ヶ原合戦に際し自害したエピソードを今も顕彰しています。



まち歩き
の折々に
クイズに
解答!



島本さんは「台地の遠足」の所々で、江戸時代の大坂の暮らしに思いを馳せるクイズを参加者に出題。

クイズ Quiz 1

19世紀半ばに起稿し、当時の文化・風俗と京阪・江戸の間での違いを詳細に記した長谷川守貞『守貞謄稿』には、大坂三郷(とくに台地以西)の水について以下のように評されています。空白には、次のどの言葉が入るでしょうか? 「大坂ハ、井水[]」

①塩気ヲ帯ブ ②常ニ濁ル ③至ッテ少ナシ

ここは昔の旅の起点の地

暗峠・奈良街道の道標

(中央区上町1丁目8)

伊勢神宮への参詣道となっていた暗峠・奈良街道が玉造地域を東西に走っており、現在の長堀通の一筋北にある旧道に面した東雲稲荷神社(玉造稲荷神社分社)の境内には、かつての街道筋にあった道標が移転され現在も残されています。



かつて旧道にあった道標には、伊勢への道や「大師めぐり」の案内などの文字が彫り込まれている。

《正面》左 なら伊(勢)
《左面》右 すぐハ京橋「一」
《背面》文政四辛巳春二月



東雲稲荷神社の境内の北側に移されて、かつての旧道にあった道標などが今も並んでいる。



道標と相続講碑が元あった位置の説明板。



近くにあった相続講の碑もこちらの境内に移されている。

上町台地から見る東の山並み

越中井から南東に向かい、玉造稲荷神社を目指しました。ここは、分社である東雲稲荷神社から街道を東に進んだところ。同社では、禰宜の鈴木伸廣さんが出迎えてくださり、お話をうかがいました。



古代、この付近は勾玉などをつくる玉作部の居住地だったとの伝承をもつ。



ここは豊臣秀頼公との縁が深いところ。秀頼の胞衣塚大明神があるほか、秀頼奇進の鳥居も境内に残されている。

玉造稲荷神社



鈴木伸廣さん
(玉造稲荷神社禰宜)

玉造稲荷神社は大坂城の鎮守の神社として、豊臣・徳川家により崇敬されました。豊臣期には大坂城三の丸に位置し、当神社付近は多くの武家が屋敷を構えていた場所です。さらに江戸時代は、ここは大坂からの伊勢参りの出発点となりました。伊勢参りが流行した当時の玉造は、道中の安全を祈願して旅立つ人、またそれを見送る人々で賑わっていたそうです。当神社の分社は1804年に松屋甚四郎、松屋源助により「浪花組(のちの浪花講)」が立ち上げられた地。この浪花講は、一般旅行者のためにつくられたもので、日本の協定旅館、旅行社の祖とも言われています。



玉造稲荷神社でのクイズは、同社の舞台からの眺望についてのもの。春の季節には、舞台から見ると周囲は見渡す限りの菜の花だったという。

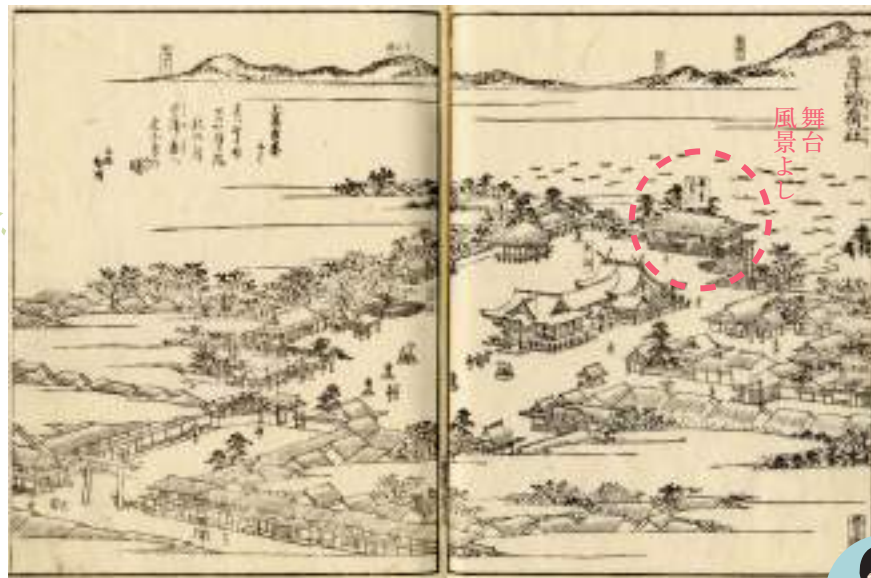
かつての展望は
菜の花一色

玉造稲荷神社 (中央区玉造2丁目3)

豊臣期の戦乱による移転などを経て、17世紀初頭には現在地に鎮座、玉造地域の産土神として信仰されてきた神社です。戦前までは社殿は西向きで、大坂三郷を正面にして建っていました。



(『摂津名所図会』寛政8〜10(1796〜1798)年、大阪市立中央図書館所蔵)



『摂津名所図会』に描かれた「豊津稲荷社」(現在の玉造稲荷神社)。画面右下が西。当時の参道や社殿は西に向いており、背後には舞台も描かれている。

〈斜めならざる山並みの眺め〉

境内東側に舞台があり、眺望の素晴らしさが謳われました。梅好は『浪花のむめ』で「東正面にして摂河ならびに大和路の峰眼前につらなりて、要津無比の景色言語にのへがたし」と記し、**暁鐘成**は『**浪華の賑ひ**』で「この所より東の山々眼前に連なりて風景斜ならず」と記しており、大阪平野の東に広がる生駒・葛城などの山並を特筆すべき眺望として挙げています。

〈玉造の景観 ～畑地と梅林～〉

江戸時代の大坂図では玉造稲荷神社周辺に「野畠」が多くあります。当時の大坂名産のひとつ「玉造黒門越瓜」はこのような畑地で生産されていたようです。また、付近には梅林も広がっており、梅好は『浪花のながめ』のなかで神社北隣にある「玉造石薬師」本堂前の紅梅「八間梅」について、「いろ香他にすぐれて見事」と評しています。

かつて玉造稲荷神社にあった舞台の写真(明治23(1889)年頃か、玉造稲荷神社提供)。高い建物になかった時代は、河内平野一帯から東方の山並みなどが一望できたという。



クイズ Quiz 2

Q 明治初頭、初代長谷川貞信が描いた名所浮世絵「浪花百景之内 玉造稲荷舞台」に記された文言のうち、空白に当てはまるのは次のどれでしょう？
「是より眺望すれば、葛城・生駒の高嶺毅然として初夏に雪をいただき、弥生のころは眼下より山際迄、菜花ならざる所もなく、彼な花に[]くもりけりといへる」

- ① 摂津村里 ② 河内一國 ③ 生駒山系

真田の出丸の伝承が残る丘陵地

玉造神社から南に向かうと、やがて上町台地上で周囲よりさらに高く、こんもりとした丘が現れてきます。ここは三光神社がある場所で、異説もありますが、付近は大坂の陣で名を馳せた真田幸村の出丸があった地との伝承も伝えられています。

狐穴か、
真田の抜け穴か



「大坂の陣400年」に関連して今年から来年にかけて予定されている多彩な催しなどについて説明する、天王寺区役所の森茂樹さん。



真田の抜け穴とも伝えられる横穴



三光神社

伝承の地に立つ
勇将の像



真田の出丸伝承の地に建つ真田幸村の像。400年前の戦いに思いを馳せる参加者たち。



江戸時代は眺望の名所として知られた宰相山

三光神社と真田山・宰相山～真田の抜け穴伝承

(天王寺区玉造本町14)

三光神社は、『**浪花のむめ**』には「真田山の稲荷の社」「本名ハ宰相山といふ」とあります。正式には、西側の丘陵が「真田山」、本神社のある丘陵が「宰相山」と呼ばれました。**暁鐘成**は『**浪華の賑ひ**』のなかで、「俗に真田山といふ、元和の頃、真田の砦ここに有りしとぞ」と記し、大坂の陣における真田幸村の出丸との関係に触れています。それ以前の18世紀末の2つの名所案内記にみられなかった真田幸村との関連が幕末期には触れられており、現在の「真田の抜け穴」伝承との関係をみる上でも興味深いものです。

(『摂津名所図会』寛政8〜10(1796〜1798)年、大阪市立中央図書館所蔵)



『摂津名所図会』に描かれた「真田山稲荷社」(現在の三光神社)。画面の右下が北。家並と耕作地のなかに、宰相山がまっかりと浮かぶ。画面右の丘陵西北麓には「狐穴多し」と記される。

〈宰相山を眺める〉

梅好は『浪花のむめ』に「真田山の稲荷の社の後に穴有、宝永年中さまゝの御利生有しとぞ」と記し、『摂津名所図会』に「狐穴多し」の記述もあり、当時、付近の丘陵の洞穴は、狐の存在に仮託される不思議な場所と認識されていたようです。また、丘陵全体を眺めた様子を梅好は「むすほれし心もとける春の日のなかき〔長き〕かすみ〔霞〕のきぬさな山」と、全体に春霞のかかる美しさを詠んでいます。参詣人を呼び込む茶店の女人を「遠近の参りの多き真田山おほつかなくも人よふことり〔呼子鳥〕」と詠んでおり、世俗的な賑やかさも見出しています。

〈宰相山から眺める〉

暁鐘成の『**浪華の賑ひ**』には宰相山からの「眺め」に関する記述がみられます。「すべてこの地は一堆の丘山にして東の方を見わたせば、比叡山の高根に続きて漸々に南に連なり、生駒・棕ヶ嶺・信貴の山・二上獄〔マ〕・金剛山より葛城の山々まで一眼に見えて、また類ひなき光景なり」と、高台からの眺望の良さが表現されています。



木立の間を進むと、そこは数多の墓標が並ぶ空間。

旧真田山陸軍墓地

墓碑が立ち並ぶ慰霊空間へ

三光神社の西側には、木々の間に数多くの墓碑が立ち並ぶ厳かな空間が広がっています。ここは旧真田山陸軍墓地。真田山陸軍墓地維持会 常務理事の吉岡武さんにおいでいただき、この慰霊空間の成り立ちと現状などについてお話していただきました。



墓地のなかには、空襲の爆撃で破壊され各所に散らばっていた墓石を集めた一画も。

平和への祈りと
鎮魂の思いを胸に



真田山陸軍墓地維持会は、剥離・崩落が進む墓碑をはじめ、貴重な墓地を保存し慰霊するために活動されている。この日は吉岡さんに、広大な敷地に長きにわたって築かれてきた、それぞれの時代の特徴的な墓域をご案内いただいた。

寺院が密集する寺町は、江戸時代の周遊ポイント

17世紀に入ると、大坂のまちは西への拡大を進め、当時上町台地に位置していた寺町群は、次第に都市東縁の一面となりました。私たちの「遠足」も、都市周縁の信仰・遊山の空間でもあった、台地の上の寺町地域にさしかかりました。

台地の上の寺町へ

陸軍墓地を北に出て、西に進むと、どんだろ大師・善福寺。かつては「大師めぐり」の巡礼地としても賑わった。この辻を南に折れると小橋寺町の地域。



心眼寺坂の上に見えるのは土堀の向こうに立つ大きな観音像。そこが、「遠足」の次の目的地の興徳寺(小橋寺町)。

小橋寺町・城南寺町・中寺町

大坂三郷には全部で11の「寺町」が存在し、現在でもこの付近には「小橋寺町」「城南寺町」「中寺町」と呼ばれる寺院が密集する地域が残されています。寺町の造成は豊臣家が大坂を支配していた天正年間(16世紀末)からはじまり、大坂城から四天王寺に至る南北の町家(南・北平野町)を東西から挟むように配置することで、天満や四天王寺・夕陽丘付近の寺町とも合わせて、豊臣期の城下町大坂の防衛ラインとしたことが指摘されています。

旧真田山陸軍墓地

(天王寺区玉造本町14)

ここは、明治4(1881)年に設置された日本最初の陸軍墓地。同年1月に兵部省が弁官にあてた「大阪府下真田山ノ内ヲ兵隊の埋葬地トナス」という一文が「太政類典」にあり、これが本墓地について触れる最初の史料です。大阪城一帯が維新期に軍事拠点として設定され、旧来の武家屋敷跡地が軍事関連施設に置き換わっていくなか、必然的に戦没者埋葬施設も求められました。そのときに、比較的広大で見晴らしが良く、自然豊かなこの丘陵地が、近代初頭において慰霊空間の設置に適うものと認識されたのかもしれません。

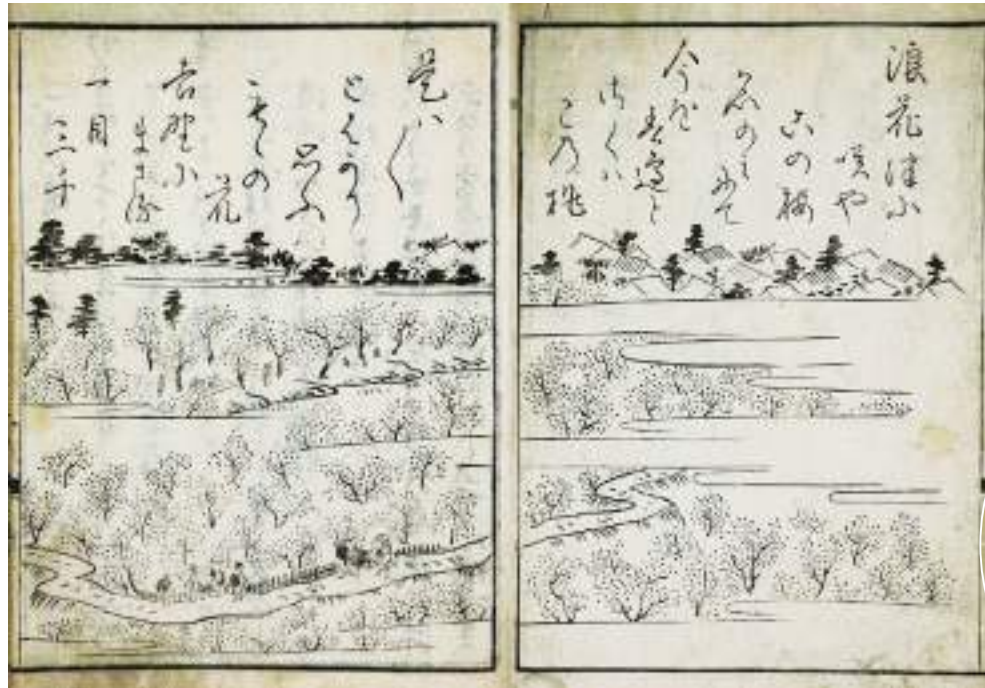


吉岡武さん
(公益財団法人
真田山陸軍墓地
維持会 常務理事)

旧真田山陸軍墓地は明治4(1871)年に設けられたもの。全国で現存する80余りある陸軍墓地の中で最初につくられ、かつ最大の墓地です。約4600坪の広大な土地に西南戦争以後の戦没者や戦病者、また軍役夫などのお墓が約5300基あり、さらには太平洋戦争で亡くなられた兵士の遺骨8200余柱を収める納骨堂があります。この納骨堂は、戦後は事実上放置されていましたが、数年前から専門家グループが詳細な調査を始めています。私たちはこの貴重な墓地の保存活動を長年続けており、一般の方向けにも、月に1度、墓地の案内会※を実施しています。

※ご希望に応じて個別の案内も実施されています。
問い合わせは、06-6762-0420(吉岡)まで。

(『浪花のむめ』白縁斎梅好、寛政12(1800)年、大阪市立中央図書館所蔵)



白縁斎梅好の『浪花のむめ』に描かれた大師巡りの道。巡礼道沿いには桃の花が咲き誇る。画面手前ではすれ違う人々があいさつを交わし、画面奥では敷物を広げ花見を楽しんでいる。

都市の中の札所を巡り、名所を訪ねる

〈都市内の札所を巡る〉

江戸時代の大坂では、観音や地藏など信仰の対象ごとに決まった縁日に、札所となっている寺社を巡る「都市巡礼」が盛んでした。ルートの総距離は3〜4里のものが多く、当時の人々にとっては信仰を兼ねた「行楽」の一種だったと言えます。近松門左衛門の「曾根崎心中」の冒頭に記され、大変なブームとなっていた観音三十三ヶ所や、弘法大師廿ヶ所(大師めぐり)などが、その代表で、巡礼の札所をいくつか兼ねる寺社も多くありました。また、孟蘭盆の時期には、「七墓参り」として、7つの墓所(梅田・浜・葭原・野田(蒲生)・小橋・蔭田・千日)を巡る行事もありました。

(『浪花百景』産湯味原池 芳雪画、安政年間(1854〜60年頃)、大阪府立中之島図書館所蔵)



東高津公園で、付近は江戸時代に墓所だったところと説明する島本さん。かつては「七墓参り」など墓所巡拝や近くにあった味原池への行楽に多くの人出があった場所。

城南寺町を通り

〈台地の名所を訪ねる〉

寺町の寺院には、当時の案内記にも載せられた名花名木のある庭園が多く、それを目当てに多数の人々が訪れました。さらに、上町台地西側の崖の樹林帯、台地上と味原池などの周辺に生育する梅林が、自然と触れ合う場となっていました。また、誓願寺にある井原西鶴や懐徳堂学主中井家の墓、方妙寺(現在、寺院は移転)にある近松門左衛門の墓など、中寺町から八丁目寺町にかけては、知識人や文芸関係の著名人の菩提寺がいくつもあり、墓所を訪ね遺徳をしのぶ場ともなりました。

寺院の土壁が続き、寺町の風情を今も色濃く残す中寺町を南に向かい、高津宮へ。



中寺町を進み

札所めぐりは「行楽」の一種



興徳寺(小橋寺町)

興徳寺門前でクイズ第3問。江戸時代、春の季節に愛でられた当地の花景色は何?



島本さんのポイント解説



中寺町に向かう途中、辻にあった道標の文字を解説する島本さん。文字に携帯電話の光を当てると、見えやすくなるという裏技も紹介。



眺望の名所から「なにわのながめ」に思いを馳せて

NEXT21からスタートし、玉造から真田山、寺町などをぐるりと回ってきた「台地の遠足」もいよいよ終盤。中寺町を抜けて、ゴールの高津宮に到着しました。ここは、古い歴史を持つ神社であるとともに、江戸時代には上町台地から西側の大坂のまちが眼下に広がる眺望の名所でした。



小谷真功さん
(高津宮宮司)

古典落語「高津の富」の舞台にもなった高津宮は、昔から人々がにぎやかに集う神社です。現在も大阪の伝統文化にちなんだイベントをたくさん行っています。江戸時代は、ここから海まで大坂のまちが見渡され、雪見をはじめ眺望の名所として、当時の観光のルートにも入っていたところ。境内や付近には茶店があったり、湯豆腐屋もあり、花の名所「吉助牡丹」などもありました。少々怪しい薬を売る黒焼き屋もあり、これも落語の題材になっています。かつては芝居街だった道頓堀は、すぐ西側にあり、歌舞伎役者や人形浄瑠璃の人形遣いなども住んでいて、芸能にも関係が深い場所でした。

高津宮

『浪華の賑ひ』 暁鐘成、安政2(1855)年、大阪市立中央図書館所蔵



『浪華の賑ひ』のうちの「高津」。近景に大鳥居、遠景に町家や船と海、北摂の山並みを描く。

高津宮 (中央区高津1丁目1)

上町台地の西の崖沿いに、仁徳天皇を主たる祭神として鎮座する高津宮は、江戸時代において、言わずと知れた眺望の名所でした。

『浪花百景』 高津 芳龍画、安政年間(1854~60年頃)、大阪府立中之島図書館所蔵



〈なにわのながめ 其の二〉

暁鐘成は『浪華の賑ひ』の「高津」のなかで、「遠眼鏡屋の云ふ、まづ最初正面にみえますは道とんぼり川の橋より芝居やぐら・ひいき幟、むかふは安治川・天保山、入ふね出ふねのけしき、右は摩耶山・武庫山・甲山、前は町々東西の御堂、左はなんば鉄眼・今宮のえびす・木津川口・千本松の風景・淡路島より須磨の浦へかよふ千鳥のなく声も耳へあてたれば聞こえますとは、あまり出たための口上なり、高津といへど豆腐のあたひ〔値〕いたつてひくし、風景は一にして二じるしの腹をなほす、

難波津に名も高き家のゆどうふはきやく〔客〕おほきみと賑ひにけり」と、眺望を解説する遠眼鏡屋の口上、そして高津名物の湯豆腐の様子を鮮やかに記述しています。

幕末の大坂を 心の中で一望

〈なにわのながめ 其の一〉

白縁斎梅好は『浪花のながめ』のなかで、高津の社の「龍の瓦」に触れたのち、「正面にハ海山を一目にながめ、眼下にハ枝川の橋を行き通ふ諸人見へわたり民の家数ハ一目千軒とやいハん万軒とやいハん、朝な夕な芝居太鼓に耳を悦こばす風けい、ことの葉にのべがたし／高き家にのぼり龍じやといふらしあめか下にて名をやながさん」と記述。台地東崖とは異なる、町家、市中の掘割、海と山からなる風景を捉えています。『浪花のむめ』には「高台にのほりて暮の雪ミレは民のかまとのうハぬりかさね」との歌があり、雪に彩られた町家の様子もうかがえます。

クイズ Quiz 4

Q 江戸時代、「高津」の名を冠する名産の一つに高津瓦(高原瓦)があり、中寺町の北から空堀にかけて土取場がありました。暁鐘成は「摂津名所図会大成」のなかで、次のように高津の土の良さをたたえています。焼いた瓦をたたく音は何に例えられているのでしょうか?
「其土最(いと)強くして色青く、瓦に焼いて美しく、響きあたかも〔 〕の如し」

- ① 銀(しろがね) ② 茶器 ③ 簀(かね)

ゴール



イベントなどのちらしやポスターが並ぶ高津宮の告知板に、「上町台地 今昔タイムズ」第3号も掲示中。

高津宮でのクイズは、時間切れで出題できず(用意されていた第4問は、高津の土の問題)。